



この冬も
たくさんの笑顔が
溢れました！

生長の家 神の国寮だより

光の泉

the spring of light



第 5 号

25年度 新春号

公益財団法人 生長の家社会事業団
児童養護施設 生長の家神の国寮
〒186-0003

東京都国立市富士見台2-39-1

tel 042-572-8770

fax 042-573-9205

<http://www.kamino92.or.jp/>



卒寮の準備と苦悩

Preparation and suffering of graduation

毎年3月、寮を巣立って社会に出ていく子ども達を見送ります。
これからの時期、担当の職員達は、共に生活できる限られた時間の中で、
この子に必要なものはなにか、自分にできることはなにか、
悩みながら考え続け、最善の道を探しています。

太陽の家 ● 川島雅次

たいようのいえ・かわしままさつぐ

「もう卒寮か」と思うほど、あつという間に卒寮の時期が来てしまった。太陽の家では今年度、2人の若者が施設を巣立ってゆく。

丁君はヘアメイクアップアーティストになるという夢を持ち、無事に美容専門学校へ進学することが決まった。いまだ高校生から明確な夢を持てることはとても素晴らしいことである。進学のための資金は、高校1年生から始めたアルバイトによる貯蓄と、様々な奨学金を集めてまかなおうとしている。学費は準備出来たとしても、生活費などは学校に通いながらアルバイトで稼いでいかなければならない。一般家庭と比べると、児童養護施設出身の子どもの進学は非常にハードルが高いと感じる。

K君は中学時代不登校であったが、高校進学を機に毎日休まず学校に通っている。アルバイトも飲食店、蕎麦を経験し、今現在はおしぼり工場週に3日、真面目に働き、従業員の方からも「仕事が丁寧」とお褒めの言葉をもらっている。初めてのアルバイトを探す際の面接では、何回も何回も不採用であった。そのこともあり、就職活動は困難を極めると思われたが、見事一発合格でリネン工場への就職が決まった。しかし、彼は幼少期からこの神の国寮で育ついわゆる施設っ子である。頼る親がいない彼は、施設から社会へ一人の力で歩んでいかなければならない。

18歳になったら特別な理由がない限り自立しなければならない。私の気持ちとしては、社会に出して、学校生活、仕事

が安定するまで施設で子どもを見てあげべきではないのかと強く思う。現に、施設から社会に放り出されて、仕事がいまぐれできず、社会に適応できずに墮落した生活を送ってしまう若者もたくさんいる。そうならない為に、社会に適応できる自立を見据えてケアをしていかなければならないと強く感じる。その反面、社会に出てからでないとそのケアが出来ないのではないかと、というジレンマがある。児童養護施設で生活する子どもたちにとって、自立のハードルは高い。施設生活から社会生活へと緩やかにステップアップできるように、ケアできる体制を切望する。

枇杷の家 ● 望月春那

びわのいえ・もちつきはるな

枇杷の家ができて、もうすぐ2年が経つ。今年も1名の女兒が巣立とうとしている。私は立ち上げ当初から、将来子ども達が母親になることを考え、できる限り家庭的な環境の中で生活してほしいと願ってきた。女兒の場合、特に我が国では、必ずしも経済的な自立だけが全てではないと考えている。好きな人と出会い、支え、明るい家庭を築くことは、これまでに家庭の中でつらい経験ばかりしてきた彼女達にとっては、経済的な自立をする

以上に難しく、自分が母親になるということもまた非常に不安なことである。

今年巣立つKちゃんは、昨年4月に入所したばかりの高校3年生である。この時期での入所は大変珍しいが、それでも入所に至った背景には大学への進学意志が強いことにあった。5月には「Keysi」の学習ボランティアさん3名がKちゃんの学習支援につき、また7月からは河合塾立川校のスタッフにアドバイザーとしてサポートしていただく等、受験一色になった。夏休みにはいくつかのオープンキャンパスへ回り、自身に合った大学に出会い、11月に指定校推薦で合格することができた。これは入所してからの私達のサポートだけではなく、つらく厳しい環境の中でずっと懸命に生きて、真面目に高校へ通い続けたKちゃんの努力の賜物だと思っている。

ここから私達は、彼女に一人の社会人として、人生の先輩として、一人の女性として、母親代わりとして、退所までの数か月間で伝えたいことが山ほどある。彼女もまた、昨年の退寮生と同様に「結婚なんてしたくない、子どももいらぬ」と言う。そういう児童の多くは、続けて「だってなんかイライラしそうだもん、だから自分には無理だと思う」とも言うのだ。彼女達に伝えたい「温かい家庭」とは一体どういうものなのか、そもそも愛情とは何なのか。四半世紀しか生きていない私に、この課題は壮大すぎてもまだ解けそうにない。

我がグループホーム(以後、GHと記載) 櫻の家(以後、櫻と記載)は中高生男子が中心のため、毎年のように卒業生がいる。今年度はA君とK君である。

光の泉

A君は都立高校に通う高校三年生である。彼の通う高校は都立高校でも特色があり、造形美術コースがある。高校生ながら、プロも顔負けなデッサンがいくつも校内に並んでいる。小さい頃からの夢である「アニメーター」になるため、A君は造形美術コースに在籍している。高校三年間では一日欠席してしまつたが、無遅刻で登校し、東京都八王子市にある東京造形大学への指定校推薦校内選考に通じ、面接試験も見事合格した。

A君は中学二年生の時に、他の児童養護施設から神の国寮に措置変更で入所してきた。初めて接した時は、いつも「死にたい」「どうせおれなんて...」「俺は悪くないのに...」と発言していた。自己中心的で、いつも責任転嫁し、反省がなく、私はいつも厳しく叱咤激励していた。櫻での生活では勉強を中心に頑張り、少しずつ成長していき、成功体験を積み上げて、自己肯定感が向上し、自信につながっていった。その結果、前に在籍していた児童養護施設の施設長もA君の成長に驚き、育ててくれた神の国寮に感謝するほどの高校生になった。後は、アパート生活の訓練と大学学費・生活資金の調達のみといえる。

K君は私立高校に通う高校三年生である。彼の通う高校は、就労のための資格を積極的に取得できるという特色がある。K君も、酸素欠乏所作業免許・低圧電気作業免許・高所作業免許の三つを取得できた。今後、フオークリフト免許を取得していく予定である。

K君は小学校六年生の時に、家族に不幸があり入所してきた。本施設で生活していたが、他の子どもと徒党を組み、問題行動を繰り返していた。中学校も不登校に近い状態であったが、当時の担当職員の尽力とK君の努力により、高校進学を果たした。進学後、櫻に移動したが、朝の起床が困難で登校することが出来なかった。職員も一生懸命登校を促すが、高校二年生二学期時点で補習・追試が263時間も溜まってしまった。しかし職員からの地道な声かけで段々とK君の意識が変わり、登校するようになり、三年生の11月の時点で、補習0時間にまで減らすことが出来た。職員もK君の努力と変貌に驚きを隠せない。高校卒業の可能性が高くなり、今後は就職活動を行っていく予定である。

このようなA君とK君は、実は非常に仲が悪い。一緒にGHで生活していても、ほとんど会話がなない。喧嘩はないものの、眼も合わさなないほどだ。しかし、10月にあったK君の誕生日会で、A君が「いままでほとんど口をきいていなかったね、でも今年で卒業だし、Kともっと話したいと思ってる」「だってもったいないよ、同じ歳で、同じ櫻で生活しているのに」と泣きながら話し、K君も同じ思い

であったのか、がっちり握手をかわしていた。観ている側としては、非常に背中が痒くなったが...。それ以後、すこしずつ会話が始められている二人である。

A君、K君の卒業には、担当職員として色々不安がある。一人で生活しているのか？ 朝は起きられるのか？ 仕事はうまくいくのか？ 大学はきちんと通うのか？ 等。しかし、櫻から卒業した子どもたちは、それぞれ課題を抱えながらも、力強く生き、社会貢献している。そのような先輩たちを見習い、A君・K君も立派な社会人として、神の国寮を巣立っていつてもらいたい。そして、成人を迎えたら、OBOG会である「飛翔会」にてお酒を酌み交わしたいと考えている。残り櫻での生活は半年であるが、出来る限りの支援を全力で行っていきたいと考えている。



↑ 資金調達に四苦八苦しているA君(左)と就職活動中のK君(右)



↑ 大学生になるKちゃんと



↑ 美容専門学校へ進学するT君(左)と就職の決まったK君(右)



【行事報告】
クリスマス会



平成25年12月7日の土曜日に、くたち市社会福祉協議会大ホールをメイン会場として、生長の家神の国寮主催のクリスマスパーティーが開催されました。米軍横田基地から55名、地域関係・ボランティア44名の皆様方にご来場頂き、施設職員43名、施設児童48名を併せて、計190名の規模のパーティーとなりました。国立市議会議員の石塚陽一先生をはじめ、多くの方々のご理解・ご協力及び心温まるご声援を頂きましたこと心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回は、ゲストの横田基地の方から、企画についていくつかのリクエストを頂きました。基地の子ども達と施設の子ども達がつと交流できるようなプログラムを用意して欲しいとのことでした。これを受けまして、施設側の方ではステージ上のプログラムの中で会場内にいる全員が参加できる「ジャンケン列車」企画を用意しました。また、横田基地からはクッキーのデ



【出講報告】
母校の「先輩と語る会」に参加して

神の国寮で働き、八年が経ちました宮原と申します。この度、私は母校である新見公立短期大学(岡山県)へ行き、「先輩と語る会」に児童養護施設で働く卒業生として、話をしてきました。私がいた幼児教育学科は、一学年52名ほどの少数で、ほとんどの学生が下宿生活をしていません。大学の周りは、春にはつくしが、夏にはホタルが飛ぶ、とても自然豊かなところなんです。そのため生徒が、様々な誘惑に惑わされることなく、学びに専念できる環境があります。今回は、学ばせていただいたことを恩返しすべく、会に参加してきました。

この仕事についてから、「大変」と思うことは何度もありました。それは、月10回の宿直、長い拘束時間という肉体的な問題が一番に想像されやすいでしょう。しかし、それよりも「大変」「辛い」と感じるのは、子どもの過去と向き合う時でした。子どもは、私の想像をはるかに超えた世界で生活していたことが多々あります。そんな過去と向き合う時、私は、自分の未熟さや無力さを感じずにはいられません。

先日、高校の合格発表を前にある女の子が私に言ってくれました。「合格発表の時には、隣に強い味方(CW)がいるからね。だから、大丈夫だ！」こんな幸せなことはありません。私は、母校の後輩に、強くおススメしました。児童養護施設で働くことは、とても素晴らしく、幸せなことですよ！！【ひまわりの家 宮原 亜弥】

そして児童養護施設の離職率が高いことは、確かです。その多くの理由は、「バーンアウト(燃え尽き症候群)」と言われてます。子どもと向き合おうと何度も何度も挑戦したCW(ケアワーカー)は、自分の無力さを日々感じていくうちに、バーンアウトしてしまうのです。

CWが子どもと向き合うことは、確かにこの仕事をする上で、必要不可欠であり、とても重要なことです。しかし、それよりも重要なのは「子どもに寄り添う」ことではないかと、私は考えます。先ほど書いた通り、子どもは、私たちの想像をはるかに超えた世界で暮らしています。その子どもと、寸分違わず同じ気持ちを感じることが、私には不可能でした。ならば、私たちCWは、その子のそばで、ただただ寄り添う、そんなことが求められるのではないのでしょうか。言葉を掛けるでもなく、何かをしてあげるでもなく、ただそばに寄り添う。一見、小さな小さな行動に見えます。しかし、それは、大きな力になるのではないかと思っています。





新任職員たなかちなつの田中千夏です。私は第2班で職員旅行（11月28～29日）に行かせて頂きました。行き先は三浦半島！

1日目は展望台に登り海を見に行きましたが、飛ばされてしまいそうなほど強風でした。第三者評価によって初めて聞いた子どもたちの意見。何となく感じていた意見や、予想外・予想以上の意見まで知ることができました。また、地元の人への優しさに触れ、普段あまり関わらなかった職員とも関わることができました。とても美味しかった海鮮丼・お子様の口にはまだ合わなかったサザエとアワビ・旅館での美味しい食事、食を楽しむこともできました。

2日目には鎌倉を観光し、スポッチャでボーリングをしました。チーム対抗戦という事で、主任・M職員と私になりました。あまりボーリングの経験がない私はプレッシャーからの緊張。初球ガーターからの最終的には初めてのスコア100越えに成功。全員で本気の勝負はとても楽しかったです。

初めての職員旅行でとても緊張していましたが、2日間とても充実した旅行になりました。【ショートステイおひさま 田中千夏】

新任職員さとうたいきの佐藤太基です。12月10日から3日間、児童部会新任職員研修会に参加させていただきました。とても考えさせられる研修になりました。その一つがベトレナム学園の鹿毛施設長先生とお話する機会があり、その時に言われた言葉です。

「佐藤じゃなくてもいい。あなたはあくまでここで働きたいと思ってきているのかもしれないが、こどもは違う。」

今まで子どもに対して下手に気を遣ったりせず佐藤太基として接してきた私にとって、すごく考えさせられる言葉でした。自分を持つことと無くすこと、どっちがこども目線なのか？ という問いに対して、答えをすぐに見いだせなくなりました。最終的に子どもが上手く行けば良いと思っ



ています。先生のおっしゃられたこと、以前にもある施設実習の際に言われたことがあります。私はその時に「この施設の考え方は私とは違う。自分に合った施設を。」と考えました。しかし、鹿毛先生に言われたことは今もう一度自分の中で考えなければいけない事だと思いました。【樺の家 佐藤太基】

新任職員ますだりゆうのすけの増田竜之介、生まれも育ちも東京都の23歳です。家族構成は父、母、兄、妹の5人家族です。楽しいことも辛いことも気兼ねなく話せる関係で、この家に生まれて良かったと思える家族です。私の趣味はゲームとお酒を飲む事です。ゲームは好き過ぎて気付いたら夜までやっていることがあります。お酒はビールが好きで、家族でもお酒を飲むことは多いですが、友人にもお酒が好きな人がたくさんいるのでつつい飲み過ぎてしまいます。

私は昔から子どもが大好きで、中学生での職業体験で保育園に行った際、この仕事をしてみたいと思いました。高校生になってもこの思いは変わらず、保育士・幼稚園教諭の免許の取れる大学に進学しました。大学二年生までは私の気持ちは揺るがなかったのですが、実習を重ねるうちに一定の時間の子どもとの関わりではなく、長い時間子どもと関わり、生活を共にしたいと思うと共に、保育士・幼稚園教諭の男性職員の少なさに驚き、肩身が狭くなってしまおうという不安があり、男女が働きやすい職場に勤めたいと思いました。そのようなことを考えているうちにあつという間に大学三年生になり、その時のゼミの講師が施設に詳しい方で神の国寮を紹介してもらいました。それが、私が神の国寮で働くことになったきっかけです。

現在私は、プラムフィールドで勤務させて頂いています。児童構成は、幼稚園から高校生までの5人が生活している男女混合のホームです。私のホームでは『みんなで守って優しさであふれるホームを目指そう。』『「ごめんなさい。」と「ありがとう。」を素直に言おう。』『思いやりを持った行動が出来るように心掛けよう。』の3つの目標を掲げ、児童はもちろん職員もこの目標が達成できるように日々の処遇に努めています。周りは目の前に畑があり、隣には乗馬クラブがあるなど自然に恵まれた環境にあります。地域との関係もお隣のお家から始まり、たくさんの方がホームのことを理解してくれているので子ども達が安心して生活できています。

私の目標は、子ども達に『お兄さんに会えて良かった！』と思ってもらえる事なので、子ども達のお手本になり、少し際のある職員を目指して頑張っていきたいと思っ





みつばちの家にて

Series report ● 【連載記事】 ⑤

生長の家神の国寮における 日本的養護・養育の実践

文＝國弘昭義 副施設長

text:akiyoshi kunihiro

『家庭的養護』における 『日本の家の伝統的な生活習慣』の実践

生長の家神の国寮では、平成24年6月に新寮舎が竣工し、本園4ユニット（各7名定員）と4グループホーム（各6名定員）となり、小規模化による『家庭的養護』の体制がハード面において整備されました。今後は、各ユニット・各グループホームが養護・養育のソフト面の充実において「子どもの最善の幸せ」のために工夫と努力を重ねていかなければなりません。

◇理想とすべき『日本の家庭モデル』◇

本園のユニット化（小規模グループケア）とグループホームによる『家庭的養護』の実践にあたっては、必然的に『家庭とは』『家族とは』という命題に対す

る、より明快なわかりやすい具体的な答え（モデル）が求められています。『より家庭に近いかたち』という物理的な小規模化ではなく、家庭の温もりや家族の情愛を知らずに育った入所児童に、今後退寮して社会人として自立し、それぞれが『家族』と『家庭』をもつ時に、このような家庭をつくりたい、こんな家族になりたいという理想とすべき『家庭』と『家族』のイメージをもたせる必要があるからです。

その意味で、理想とすべき『本家庭的養護』を児童のかけがえのない生活の場であるそれぞれの『お家』において実践し創造していく必要があります。

具体的には、かつて日本の家庭に必ず置かれていた「神棚」や「仏壇」がある家庭のイメージ、すなわち、「いのちの系譜」である先祖を祀り、年長者を敬い、家族仲良く助け合い、明るい挨拶が交わされ、食卓を囲む家族団らんのあるという『日本の家庭モデル』を創出することであると考えます。

現在、各ユニット、各グループホームには「神棚」が設置され、毎朝、職員が率先して榊の水を浄め、「大祓祝詞」を誦読しています。そうした職員の姿は、かつて日本の多くの家庭で見られた伝統的な「親の姿」でもあります。

また、児童の「生い立ちのふりかえり」の一環でもある「お墓参り」も職員が付き添って実践しています。

◇日本の家の伝統的な生活習慣の実践◇ ―「年中行事」を大切に― 家庭の創造―

日本の家の伝統的な生活習慣の実践には「年中行事」の学習と実践が欠かせません。年間を通じて、以下の「年中行事」に取り組み、職員と児童がともに学び合いながら日本の伝統行事の意味を習得することに努めたいと願っています。以下、主な年中行事や祝日にまつわる意味を今回と次回の2回にわたって記述します。

↑主な年中行事と祝祭日の一覧↓

・1月の行事

正月、元旦
※門松、しめ飾り、鏡もち、若水迎え、おとそ、お雑煮、おせち料理の意味を児童に説明しながらしつらえる。

※初詣の意義を学びながら、地元
の神社にお詣りする。

七草がゆ
成人の日

・2月の行事

節分、豆まき
※節分の由来と意味を話して、豆まきを行う。

建国記念の日
※神武天皇が即位された日が建国記念の日として定められた意味を学習し、2674年前に建国され、世界

で最も古い歴史をもつ我が国の長く尊い歴史を偲ぶ日とする。

・3月の行事

ひな祭り
お彼岸（春分の日）
※父母、祖父母、曾祖父母・・・と繋がる「いのちの系譜」を学び、ご先祖さまに感謝する日とする。また、お墓参りができる児童は職員とお墓参りを実施する。

・4月の行事

花祭り
昭和の日
※昭和天皇のご聖徳を偲ぶ日として、「自分の身はいかなるうとも国民を救いたい」と言われた「終戦の御聖断」や「マッカーサー元帥との御会見」「焦土と化した敗戦後の国民を励まされた3万3千キロにおよぶ戦後のご巡幸」等のエピソードを学びながら職員と児童が「激動の昭和史」に思いを馳せる日とする。

・5月の行事

子どもの日
※「端午の節句」の意味を学びながら、児童の健やかな生長を祈り、この世に生まれ、今、元気で生活できることに感謝する日とする。

母の日
※この世に生を受けたのは、ご先祖さまと父母のお陰である。とりわけ、お母さんが自分をこの世に産んで下さったことに感謝する日とする。

（以下、次号に掲載します）

チームケアの実践!!

文＝須江宏行
text:hiroyuki sue
自立支援コーディネーター

illustration:kouhei okuzuka



先日近所の焼肉屋に行った。カウンターを含めた20名弱の規模の小さなお店でいつも満席である。無愛想な旦那さんと、瓜二つの息子さんがキッチンに、ホールには愛想の良い奥さんがおり、三人で店を切り盛りしている。常連の客がたくさんいるようで奥さんもオーダーを取りながら客との会話が弾んでいる。カウンターに座っている私は生ビールをおかわりしようと旦那さんにオーダーをすると何も言わずに奥さんが笑顔で追加の生ビールをもって来る。夫婦だからこそ、店が狭いからこそ成せる「阿吽の呼吸」である。

肉のオーダーもピークを過ぎ客に出し終わると、旦那さんと息子さんはキッチンで煙草に火を付け一服。奥さんはお客さんの輪に入りながらお茶を飲んでいた。肉の味は兎も角、雰囲気の良い店だなと感じながら勘定を済ませた。

近年、児童養護施設では施設の小規模化が叫ばれ、多くの施設が実践に取り組んでいる。神の国寮もその中の一つであり、昨年度施設の全面改築を終え、新たな生活形態で新たな生活が始まっている。全国規模で見ても3年前の統計では*大舎制の施設が70%、中舎制17%、小舎制21%となっていたが、直近の統計は大舎50%、中舎26%、小舎40%となっている(あわせて100%にならないのは一施設で中舎+小舎等の形態を取っているため)。この推移は主に東京都の児童養護施設がグループホームの増設、また本体施設の小規模化を図った結果であり、家庭的養護推進の一翼を担っている。

だがこの家庭的養護の推進は職員にとって大変なことがいくつかある。大舎制時代の勤務体制は必ず複数人で子どもたちの生活を見守っており、若手の職員達は先輩の背中をみながら子どもとの関わりを学ぶことが出来た。現在は一人勤務

が主流となっており一年目の職員であれ、ある一定の時間6人程度の子どもの生活を一人で見守ることになっている。このため職員個人の力量が問われる部分が強く人材の確保、職員育成の強化は神の国寮の中だけではなく業界内でも喫緊の課題となっている。

これと平行して入所児童の家族の相談役として「家庭支援専門相談員」、里親委託の推進を図るために「里親支援専門相談員」、専門的に心のケアを行う「心理療法担当職員」「治療指導担当職員」、自立支援と退所後のケアの強化を図るために「自立支援コーディネーター」(東京都のみ配置)等、これらの業務を中心に行う役割の配置整備も成されてきた。このようなことを契機に児童相談所は元より、外部の支援団体、医療機関等あらゆる機関との「連携強化」が必要とされている。

私が入職した10年前はすべての役割を児童担当のケアワーカーがこなしており、決して水準の高いケアではなかったかもしれないが、課題と正面から向き合い子どもたちにとって最も良い選択肢を試行錯誤しながら仕事をこなしていた。これが児童との愛着を形成する上で良い材料となっていたように思う。ただその反面、必要な情報や方法論を知らずに子どもに還元することが出来なかったり、客観的な視点がないためによかれと思ってやったことが子どもにとって逆効果だったりという経験も多々あった。

このような制度上の流れの中で、児童養護施設は遅ればせながら「分業(業務分担)」の時代に差し掛かってきたように思える。

先日外部支援団体の学習会に参加した際に、ある企業の社長さんと一緒にお酒を飲む機会があった。その中で仕事をする上でのチームワーク構築について熱

く語り合った。社長さんはおっしゃった。

「人間は他者のことを思う気持ちはみんな持っている。だが自分のことを伝えるのはあまり上手くない。一緒に仕事をする相手に自分がどういう人間であるか、また仕事に対してどういった思いがあるかを伝えていかなければ、協力体制(チームワーク)は生まれないのだ。互いにしっかりと意見交換が出来る関係性を築いてこそ、素晴らしい組織が出来上がるのだ。」

体制が整備されると「How to」{どのように〇〇をするか}が先行する。だが我々が仕事する上で「Why」{なぜ〇〇をするのか}は非常に大切なことであると考えられる。

この「方法論How to」と「感覚論Why」はどちらが前に出過ぎても駄目なのだ。何となく良いバランスで同じ位置にあることが望まれる。

体制の変化に順応するのは意外と子どもたちの方が早く、大人は変化に順応するまでに些か時間がかかる。今後もさらに各ホーム内で、またホーム職員と専門的な仕事する職員間においても意識の共有を図り続けることが、神の国寮の子どもたちの最善の利益の追求に繋がると考える。

我々児童養護施設の職員は夫婦ではなく、それぞれ「思い」や「やり甲斐」を持ちながら子どもたちの生活を見守っている。焼き肉屋のご家族のような「阿吽の呼吸」をすぐに生み出すことは難しいのかもしれないが、それに近いものを目指せるように今後も「相互理解」と「調和」を大切に子どもたちの生活に長く寄り添っていきけるような施設でありたいと思う。

* 大舎、中舎、小舎について…大舎は20人以上の生活形態、中舎、小舎はそれ以下の生活形

児童の自立支援のための募金のお願い

～児童の自立支援のための「サポート・ペアレント」になってください！～



大学や専門学校に進学する子どもの生活をサポートするために、毎月一定額を支援して下さる方が「サポート・ペアレント」です。一口3,000円（月額）から「サポート・ペアレント」に登録して頂けます。毎年、支援を受ける子どもからサポート・ペアレントの皆様にお礼の近況報告をさせていただきます。

募金の申し込み方法

- ・ 振込用紙に必要事項をご記入の上、郵便局にてお払い込みください
- ・ 事務局にてご入金を確認した後、受納証・季刊『神の国便り』をご送付させていただきます
- ・ 直接、当施設にご持参いただいても結構です

- (1) 郵便局を利用される方・・・口座番号 00190-7-599648 児童養護施設生長の家神の国寮
- (2) 銀行を利用される方・・・・・・・・・・ゆうちょ銀行 店番019 当座 0599648

【 寄付金・寄贈を下さった方々 】

平成25年10月～12月（順不同・敬称略）

<寄付金> 多摩管友会 会長 島崎修一／城下早苗／国立社協 三田俊子／井嶋栄治／桜乃 社長 大野幸枝／大橋利美子／大久保医院 新井ゆみ

<寄贈> セカンドハーベストジャパン／多摩管友会 会長 島崎修一／日本スポーツ用品協同組合連合会 理事長 重森仁／佐藤和子／安濃主税／コストコホールセールジャパン(株)／東興工業(株)／岡村利子／門司一徹／斉藤美千代／矢橋仁志／稲生茂豊／岡本初枝／(株)チュチュアンナ／SBI子ども希望財団／第一生命保険(株)／(株)ガイア／ダイマツ商店 日原／檜良子／ほっともっと／(株)メリーチョコレートカンパニー／辻本深雪／毎日新聞 東京社会事業団／一般社団法人 東京馬主協会／神楽サロン 代表 奥山秀朗／日本鏡餅組合 理事長 樋口元剛／大久保医院 新井ゆみ／モンテ物産(株)／市川秀和・恵／岡田真紀子／(株)リクルートライフスタイル／(株)晃和ディスプレイ 新穂公祥

<サポートペアレント> 宮原妙子／村田幸子／佐々木邦枝／戸板由美子／岡本初枝／北浦徳章／長谷川ゆみ子／村木久美子／成田薫／三橋靖子／横山美恵子／橋本真也／古屋タカ／曾根原康介／清野輝江／広瀬基枝子／浜口尚代／河西信幸／中川周子／大原和子／長嶺義次／丸山澄子／坂本香代／北川博／井嶋栄治／二宮清／高橋幸三郎／橋本きくい／下田ヒロ子／他有志

第二回 管理栄養士 ● 村木将人



管理栄養士とは、厚生労働大臣の免許を受けて、「傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導」「個人の身体の状況、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導」「特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体の状況、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等」を行います。

私が神の国寮で働き始めたのは、今から20年程前の事になります。当時の神の国寮は、子どもと職員合わせ60名が食堂に集まって、食事をしていました。その頃私は、食事作りに追われながら、より美味しいものを美味しい状態で提供することに必死だったことを思い出します。子ども一人ひとりを思いながら、食事作りを楽しんでいる私がいました。現在神の国寮では、小規模化が完了し、食事の場面が分散したこともあり、私自身が厨房に立つことは、ほとんどなくなってしまいました。しかしそれは、本来子どもたちと愛着関係を築く愛すべき保育士・指導員さんが、その子どもの為に食事を提供し、あたりまえの日常を提供できることに喜びを感じております。

そんな状況で栄養士さん何しているの？ と、よく質問をされます。しかし栄養士の仕事は、献立を作り給食を運営することではありません。栄養士の仕事とは「栄養の指導と栄養改善上の指導」です。当然栄養という言葉には日常生活全般はもとより、食育の推進や自立・自活支援さらには、家庭への支援など幅広い意味が含まれております。今後とも子ども達の最善の利益のために、生涯にわたるQOLの維持向上のために邁進していきたいと思っております。

編集後記

1月の成人式、都内の児童養護施設出身の女性3名に「初代タイガーマスク基金」が、振袖のレンタルとヘアメイクをプレゼントしたというニュースがありました。今号の記事にもある通り、施設出身者達へのサポートにはまだまだ足りない部分が多くあります。伊達直人の名で贈り物をする先駆けとなった男性は、自らの幼少期の辛い経験から、今の活動に到ったそうです。今後も支援の輪が広がるよう、また支援を受けた子ども達が将来支援出来る側になれるよう、願うばかりです。【木原】